

I 研究主題について

御船中学校

1 研究主題

『わかる』『できる』『興味が高まる』授業の創造～SMARTな授業実践と家庭学習の連携を通して～

2 研究主題設定の理由

(1) 学校教育目標の具現化を図るために

本校の教育目標は「ふるさとに誇りをもち、夢の実現に向けて共に努力する生徒の育成」である。学校教育目標の具現化のために「学力の向上」は大きな重点事項であり、学校総体で取り組んでいかなければならない。昨年度の11月の校内アンケートでは次のような生徒の実態が見られた。(資料1)

【項目】「平日は、家庭学習をどのくらいしていますか。」

家庭学習時間	現中学2年	現中学3年
○2時間以上	11.6%	16.1%
○1～2時間	31.9%	39.4%
○30分～1時間	50.0%	33.6%
○30分より少ない	5.1%	8.0%
○家庭学習をしていない	1.4%	2.9%

資料1 令和2年度11月校内アンケート

以上のことより、本校の生徒は授業で学習した内容の定着を図るための家庭学習の時間において、1時間未満の生徒が中学3年生には44.5%、中学2年生には56.5%いることがわかった。

このような状態では学習に対して、「わかる」、「できる」、「興味が高まる」という学習の喜びも味わえず、ひいては学習意欲の低下を招いていることは十分にわかる。

以上の事柄をふまえ、意欲的に学習に取り組むためにも、また学校教育目

標具現化のためにも、SMARTな授業実践に取り組みながら、生徒が家庭学習を充実する取組が必要であると考えます。

(2) 社会の要請から

熊本県では昨年度から「熊本の学び」の取組が始まり、熊本県教育委員会もそれぞれの学校及び地域の実態に応じた「熊本の学び」の推進を求めている。本校では、4年前から熊本の学びの研究指定校として研究に取り組み、昨年度は「御船中学校版『熊本の学び』による学力の向上」を研究主題として、SMARTな授業実践を行った。本研究は昨年度までの研究をさらに深め、生徒の家庭学習の充実を図ることで、熊本県の要請に寄与するものである。そこで研究主題を「『わかる』『できる』『興味が高まる』授業の創造 ～ SMARTな授業実践と家庭学習の連携を通して～」とする。

(3) 研究主題の捉え方

本研究で述べる「学力」とは、学校教育法第30条2「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」の規定に沿うものである。

また、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」においては、①知識・技能の習得、②思考力・判断力・表現力等の育成、③学びに向かう力・人間性等の涵養の3つを学力の要素としており、本研究では、以上の3要素を「御船版『熊本の学び』」を通して、向上させるものである。

本研究は、全校生徒に対して行うアンケートや聞き取りをもって研究の成果とする。

II 研究の方法



1 研究の仮説

(1) 授業において、①「わかりやすい指示や発問（シンプル＝S）」、②「生徒と共有した『めあて』の設定（目的・目標＝M）」、③「自力解決と協働解決の場の設定（アクティブ）＝A」、④「定着を図る時間の確保（練習＝R）」、⑤「問い方を工夫したまとめ・振り返り（たしかめ＝T）」のSMARTを意識した授業を行えば、生徒は「何が分ればよいのか」、「何ができればよ

いのか」が明確になり、学ぶ意欲の向上につながるだろう。(資料2)

御船版「熊本の学び」 SMARTな授業実践

S	シンプル	学習内容を焦点化する わかりやすい指示や説明・発問（簡潔に、視覚で捉えやすく）をする
M	目的・目標	単元のゴールの姿を設定する 「何が分ればよいのか」「何が出来ればよいのか」を明確にして『めあて』を示す
A	アクティブ	児童生徒が活動する時間を確保する 教師がしゃべりすぎない
R	練習	定着を図る時間を確保したり、小テストを実施したりする
T	たしかめ	共通のノートである板書をもとに学習のまとめをする 児童生徒が学びを振り返る「問い」をする

S 学習内容の焦点化

本時の目標を達成するために、「教えること」と「考えさせること」を整理して、活動の時間確保をしよう！

※ 指示や説明・発問をシンプルにするためには、学習内容の焦点化が必要です。「あれも」「これも」と欲張らずに、児童生徒全員が活動し、達成感や疑問・気づきが生まれるために「考える」活動を精選しましょう。

S 簡潔で視覚で捉えやすい指示や説明・発問

指示や説明等を、明瞭な声で、短い言葉で、言い換えをしない！
 (同時に複数の指示や発問をしないことを原則に、長い説明等は一文を短く区切る)
 指示や説明・発問は、できるだけ板書（イラスト等で示す）しよう！

Before

▲ 児童生徒が教科書を読んでいるときに、「太郎の気持ちが書かれている部分に線を引く、気持ちが大きく変わっているところに赤で丸をかいてください。」と指示をだす

➔

After

○ 一端読みを止めさせて注目させ、「読み終わったら、2つのことをします。」

①太郎の気持ちが書かれている部分に線を引く

②太郎の気持ちが大きく変わっているところに○をかく（板書する）

◇ 話の聞き方をルール化することも大切です。(全員が集中するまで、話をしない)

資料2 「御船版『熊本の学び』SMARTな授業実践」リーフレット

(2) 家庭学習において、「授業と関連性の高い課題の工夫」と「定着を図る時間の確保」を行えば、学習習慣の定着と基礎学力の定着につながり、ひいて

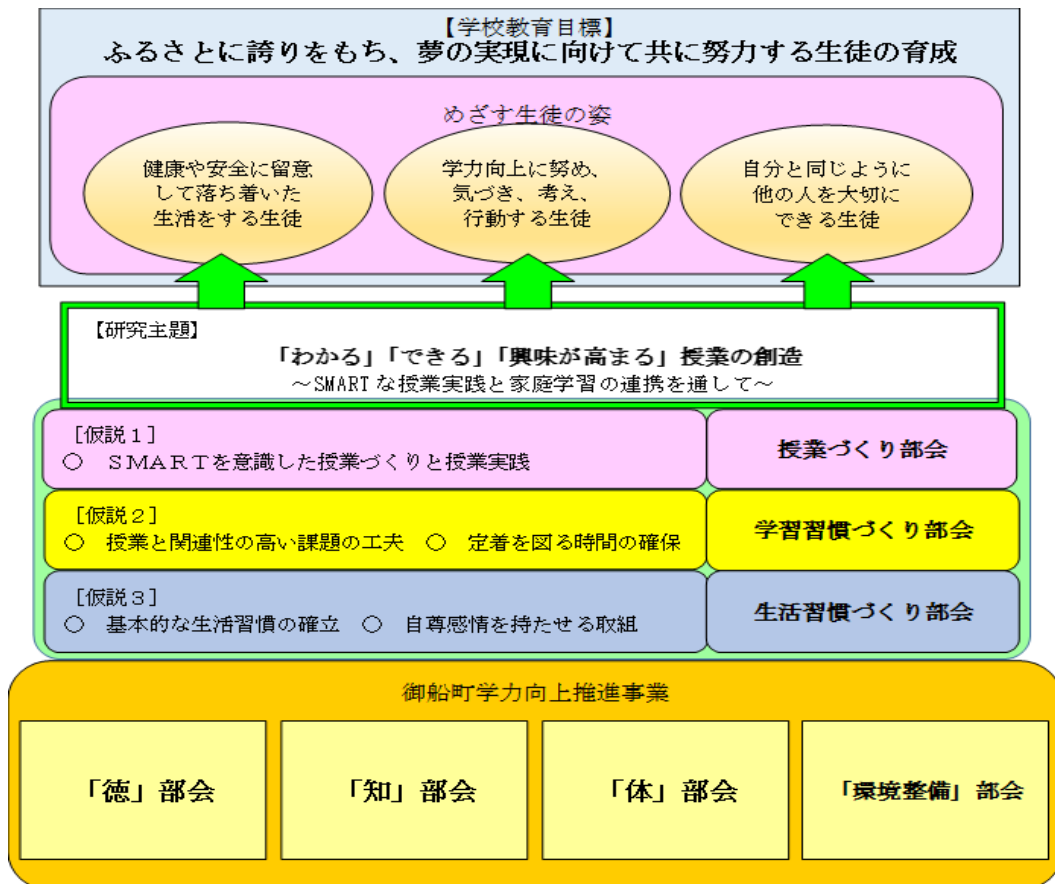
は授業へ参加する意欲も高まるだろう。

- (3) 教育活動において、基本的な生活習慣の確立や高い自尊感情を持たせる取組を行えば、何事にも達成感が得られるようになり、生徒が物事に粘り強く取り組み、ひいては学習への意欲も向上するだろう。

2 研究の視点

- (1) 生徒の学ぶ意欲の向上を図るために、SMARTを意識した授業づくり、授業ウォッチング月間の取組、授業の基本的姿勢の徹底、教育実践報告書の作成を行う。
- (2) 生徒の学習習慣の定着と基礎学力の定着のために、授業と関連性の高い課題の設定と学習内容の定着を図る時間を確保する。
- (3) 生徒に達成感を味わわせ、物事に粘り強く取り組ませるために、生徒会と連携した生活習慣の確立の取組、地域社会と連携した取組、自尊感情を高めるエンカウターの取組を行う。

3 研究の構想



資料3 研究構想図

Ⅲ 研究の内容

1 SMARTを意識した授業づくりと授業実践

(1) SMARTを意識した授業づくり

4月の校内研修において、S・M・A・R・Tの視点を意識した授業づくりを行い、授業実践を行うことの確認を全教職員で行った。職員には『御船版「熊本の学び」SMARTな授業実践』のリーフレットを配付し、共通理解を図った。(資料4)また、SMARTを意識した授業づくりの深化の

M 本時に「〇〇ができる(～がわかる=～を説明できる)」が明確な『めあて』の提示

『めあて』を目に見える活動の表記にして、児童生徒と目指す姿を共有しよう!

※『めあて』とは、45(50)分の授業が終わったときに目指す児童生徒の姿(目標)です。学習課題や問題提示、発問とは区別します。

Before

- ▲ どうして「走れメロス」と題をつけたのだろうか(小学校国語)
- ▲ 鎌倉時代の武士と民衆の生活の特色を調べよう(中学校社会)

After

- タイトルに込められた作者の思いを説明できる(小学校国語)
- 鎌倉時代の武士と民衆の生活の特色を双方の違いや以前の生活との違いを示して説明できる(中学校社会)

◇ 『めあて』カードを使い、黄色チョーク等で枠囲みましょう。

◇ 教師が一方向的に『めあて』を提示するのではなく、前時の振り返りや児童生徒の気づきやつまずきを生かして、児童生徒の「わくわく」が連続する『めあて』の設定へ導きましょう。

A 全員の「やってみよう」「なるほど」が生まれる“自力解決”と対話的で深い学びが生まれる“協働解決”の場の設定

見通しをもった“自力解決”にしよう!
必要性・手段を明確にした“協働解決”にしよう!

※『見通し』とは、解決の方法や手順を自分なりにイメージすることです。

※『必要性・手段』とは、何のためにペアやグループ活動をするのか、何について話し合ったり協力したりするのか、どのような方法・役割で活動したりするのかということです。

Before


- ▲ 見通しをもてない生徒がいるのに、自力解決の時間を長くとり、個別指導でヒントを出す(自力解決にならない)
- ▲ 意見が出ないから(時間に余裕があるから)、班で話し合う時間を設ける

After

- 互いの気づきや解決の方針を出し合い、解決方法や手順を可視化して自力解決の時間を設ける
- ペアやグループで活動する意義を確認し、活動の方法や役割、話し合いの視点を可視化して活動させる

◇ 協働解決では、どんな手順で何をすればよいかのかを、簡潔に(箇条書きで)板書しましょう。

◇ 自力解決、協働解決の過程での気づきや交わされた意見をノートやシートに記録させましょう。児童生徒が自分の成長を実感し、主体的に課題を解決する力を身につけることができます。



資料4 「御船版『熊本の学び』SMARTな授業実践」リーフレット M・A取組例

ために、研究授業を4回行った。

① S（シンプル）における授業実践

S（シンプル）における授業実践では、数学科において、メニューボードで活動の流れや解き方を示すことで、自力で解くことへの意欲を高めること、取り組む活動を注視できるようにすることなどに取り組んだ。（資料5）



資料5 S（シンプル）における授業実践

② M（目的・目標）における授業実践

M（目的・目標）における授業実践では、英語科において単元の前あてや単元計画を初めの時間に提示することで、単元の見通しを持たせたり、意欲を高めたりすること、題材の前あてを生徒と共有し、生徒が単元を通じて課題意識を持ち続け、学びに向かう力を高められるようにすることなどに取り組んだ。（資料6）



資料6 M（目的・目標）における授業実践

③ A（アクティブ）における授業実践

A（アクティブ）における授業実践では、国語科においてジグソー法を取り入れ、分担を決めて1つの文章を各自がじっくりと読む時間を設定し、それぞれの内容をグループ内で共有することで、複数の文章を読み取る活動を行った。（資料7）



資料7 A（アクティブ）における授業実践

④ R（練習）における授業実践

R（練習）における授業実践では、数学科においてグループで取り組む問題について、問いかけや助言を教師が適切に行うことで、深い学びへと誘うきっかけを作った。その後、グループティーチャーの生徒を指名し、生徒が主体的にグループの学習を進める中で、相互に理解を深めさせた。（資料8）



資料8 R（練習）における授業実践

⑤ T（たしかめ）における授業実践

T（たしかめ）における授業実践では、国語科において毎時間の終わりに振り返りを記入する時間を設け、十分に振り返りができている生徒を紹介することで、「たしかめ」という学習活動の質を高めた。（資料9）



資料9 T（たしかめ）における授業実践

(2) 授業ウォッチング月間

9月から10月の期間を授業ウォッチング月間として、教員が授業を参観することで、互いの技術を学び合い、授業改善を図った。また、参観することで、他教科での生徒の学習の様子を観察することができ、生徒理解を深めることもできた。（資料10）

授業ウォッチング 参観メモ				
月	日 ()	教科等名:	授業者:	先生
参考になったものに○、「すごい!」と思ったものに◎をつけてください。 短時間の参観のため空欄でも構いません。				
S: シンプル 【 】 学習内容を焦点化している 【 】 わかりやすい指示や説明・発問である（簡潔に、視覚で捉えやすい）				
M: 目的: 目標 【 】 単元のゴールを設定している 【 】 OUT PUTの活動で「~できる」の表記で「めあて」を示している				
A: アクティブ 【 】 生徒全員が活動している 【 】 教師がしゃべりすぎない				
R: 録音 【 】 定着を図る時間がある				
T: たしかめ 【 】 板書を見れば、1時間の学習の流れがわかる 【 】 「めあて」と整合した「まとめ」や「振り返り」がある				
学習態度 【 】 生徒は、立派の姿勢で学習に集中している				
一口感想を書いてください。(簡単に)				

参観者 ()

資料10 授業ウォッチング参観メモ

(3) 授業の基本的姿勢

昨年度に引き続き、SMARTな授業実践を進めていく上で、生徒の授業を受ける基本的な姿勢を確立することが大切であると考えた。そこで、本校全体で統一した「学ぶ姿勢」を示し、教師が「立腰の姿勢を整えてく



ださい」などの声かけを授業の中で行った。資料11 立腰の姿勢図

(資料11)

(4) 教育実践報告書

昨年度、SMARTを意識した授業実践を記録にまとめることで資質の向上を図るとともに、教育技術を学び合う機会を設けた。また、校内研究の活性化に資することを目的に、教員が教育実践報告書を作成した。本年度も1年間の取組を教育実践報告書にまとめる予定である。また、県教育センターから指導主事を招き、報告会を行うことでさらなる資質の向上を図る予定である。

2 授業と関連性の高い家庭学習の工夫と定着を図る時間の確保について

(1) O.S.P (おうちstudyプログラム)

2学期より、O.S.Pという取組を行った。O.S.Pとは、「おうちstudyプログラム」とある通り、家庭学習を定着させるための取組である。(資料12)

O.S.Pの取組では、資料12にあるように、教科ごとにその日の家庭学習の内容を、生徒や教員がメモしておき、学級全体に周知を行う。O.S.Pに書きこむ課題は、短い時間でできるようなものにし、長時間取り組むような課題は書かないようにすることや、5教科以外の美術科、音楽科、保健体育科、技術家庭科の課題は、実技教科として1つの枠に

O.S.P (おうちSTUDYプログラム)				
教科	内容	目的	所要時間	期間
国語	批評文	○復習 ()予習 ()生活職	5分	19/22
社会	プリント	()復習 ()予習 ()生活職	分	10/22
数学		()復習 ()予習 ()生活職	分	
理科		()復習 ()予習 ()生活職	分	
英語	プリント	○復習 ()予習 ()生活職	分	10/25
実技教科				

資料12 教室掲示されたO.S.P

書きこむことなどのルールを設定した。数分間できるような課題のみを書きこむと設定した理由として、まだ家庭学習が定着していない生徒に対しては、スモールステップで段階を踏んで取組を行った方が良いと考えられるからである。

また、家庭学習の「内容」だけでなく、復習、予習、生活実践等の「目的」、「所要時間」、提出までの「期間」も詳細に記すことで、生徒自身が見通しをもって家庭学習に取り組むことができるように工夫を行った。

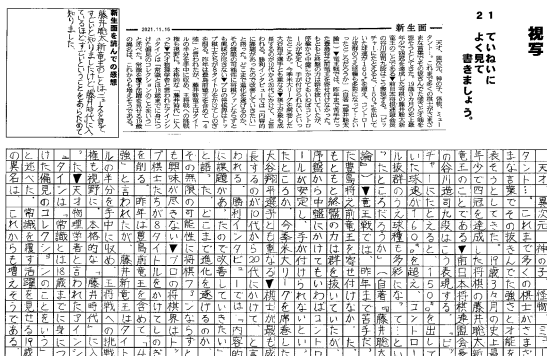
この取組を行うことで、家庭での学習習慣づくりに加え、その日の家庭学習で何をすればよいのかわからない生徒や、計画的に学習を進めることが難しい生徒への手立ても期待できる。

そして各教科担当が、課題をしているかどうかのチェックを行い、事後指導を行うことで、家庭学習の確実な定着を図った。

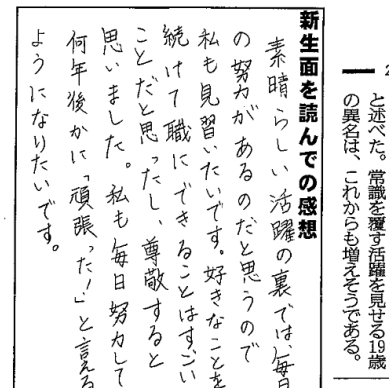
(2) 学力向上プロジェクト

9月から11月(火、水、木)の朝活動(8:10~8:30)の時間に、県学力調査・共通テスト前の補充指導や基礎学力の定着のため、国語、数学、英語、NIE活動の学習を行った。月、金は1学期に引き続き、朝読書を行った。それぞれの学年の教科担当が、過去問題などから問題を選びプリントを準備し、指導を行った。それ以外の教員はT2として朝学習に参加した。学習形態を工夫し、個人で問題に取り組んだ後、班で話し合ったり、教え合ったりなどの課題の協働解決の場を設定した。また、班内での話合いが活発にならない場合は班員2名が他の班へ移動して話を聞き、自分たちの班に説明を行うことで、話合いや教え合いの活性化を促した。

また、NIE活動の時間には熊本日日新聞の新生面から記事を選び、視写をした後、その記事に関する感想を書く活動を行った。(資料13、14)



資料13 生徒の視写の成果物



資料14 生徒の感想文

(3) 朝の読書活動

本校では令和元年度まで朝読書の時間の設定がなく、図書の貸し出し数も年間1000冊に満たず、読書活動が活発とは言いがたい状況であった。また、県学力調査の分析から、各教科において文章や資料を読み解いて解答する問題が苦手であることが本校生徒の課題として挙げられた。そこで、読書量を増やすことによる読解力、表現力の向上をねらい、朝読書に取り組んだ。読書が苦手な生徒からは、「どんな本を選んでいいかわからない。」「読みたい本が少ない。」という意見があり、朝読書をさらに充実させるために、①朝読書の図書室利用②学級文庫プロジェクト③書店での選書活動に取り組んだ。

① 図書室を利用した朝の読書活動

学級単位で、図書室での朝読書を行った。(資料15、16) 普段、あまり図書室を利用しない生徒も、より多くの本に触れ、読書の幅を広げることをねらいとした。この時間は貸出もできるため、図書の貸出数が大幅に増加した。



資料15 図書室での朝読書



資料16 学級への連絡カード

② 学級文庫プロジェクト

学級文庫の充実を図るために、家庭から読まなくなった本の提供を呼びかけた。生徒や教職員から123冊もの本の提供があった。生徒集会でブックトーク方式で紹介し、学級文庫として活用した。(資料17)



資料17 学級文庫プロジェクトに提供された本

③ ブックセレクト(書店での選書活動)

図書委員会が実施した「図書室に配置してほしい本のアンケート」の結果をもとに、図書委員の生徒が書店で実際に本を手にとり、購入する本を選ぶ活動を行った。(資料18、19)



資料18 ブックセレクトコーナー

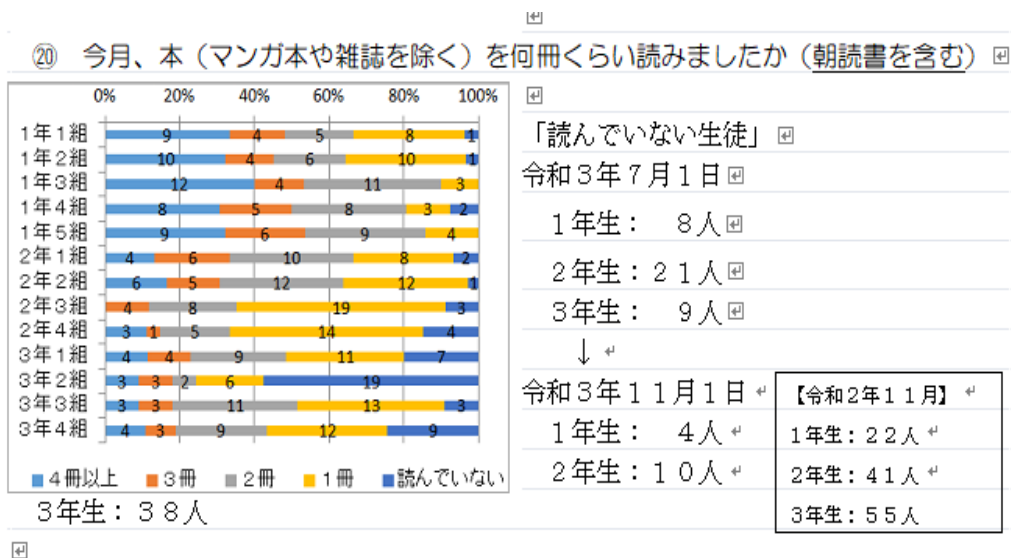


資料19 書店での選書活動

今年度は、195冊の本を購入し、図書

室にコーナーを設置すると多くの生徒が利用した。

生徒アンケートから、1か月に全く本を読んでいない生徒は減少し、朝読書の取組が「不読」の問題に対して一定の効果が上がったといえることができる(資料20)。今後は、受験を控えた3年生の読書のありかたや読解力、表現力の育成につなげるための読書の質の向上が課題である。



資料20 生徒の読書量の推移

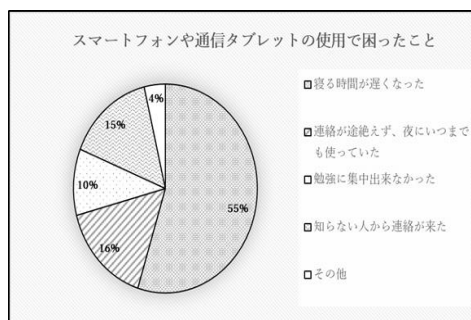
3 基本的な生活習慣の確立のための取組について

本校では、生徒の学力、体力を十分に発揮させるため、心身の健康を保持・増進させることが重要だと考える。生徒が生活習慣を整え、進んで体を動かし、心身の健康を意識して、自己管理できる力を身につけること目指している。

(1) 生徒会作成のスマホルール

生徒会では、スマホやタブレット、ゲーム機器等のメディアの使用状況についてアンケートを行った。(資料21)

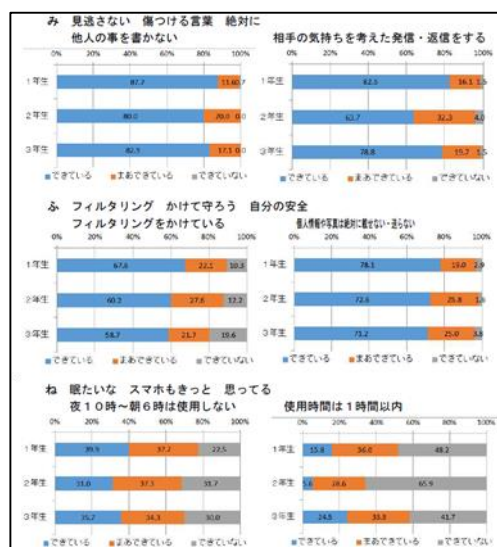
結果からは、「メディアを使用することで寝る時間が遅くなった」生徒が60%程度、「勉強に集中出来なくなった」や「知らない人から連絡が来たり呼び出されたりした」生徒が30%程度いることがわかった。多くの生徒



資料21 生徒アンケートの結果

がメディア使用によって生活リズムを崩し、学習に集中出来ず、よく知らない人と連絡をとってしまうという危険にもさらされてしまっていることがわかった。これらの結果を全校生徒に紙面で報告し、自分たちが今後守っていくべきスマホルールを募集した後、集まった意見をもとに、「み『見逃さない 傷つける言葉 絶対に』、ふ『フィルタリング かけて守ろう 自分の安全』、ね『眠たいな スマホもきっと 思ってる』」（みふね）という本校独自の新しいスマホルールを設定した。

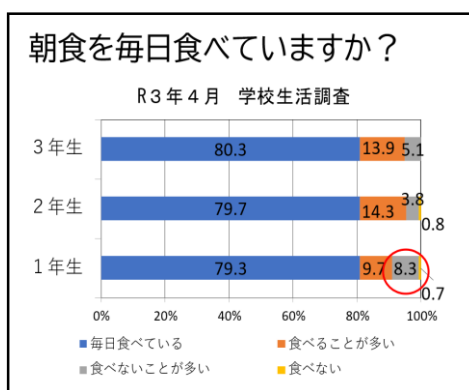
その後も、全校生徒にアンケートを行い、スマホルールの徹底の状況を確認している。その結果から、相手を思いやったメッセージのやり取りはほとんど全員が意識することができているが、フィルタリングを設定するというルールや、夜遅くや長時間使用しないというルールの徹底が不十分であるということがわかった。（資料2 2）今後も継続して生徒の意識確認を行っていく必要がある。



資料2 2 生徒アンケートの結果

(2) 早寝・早起き・朝ごはんの取組

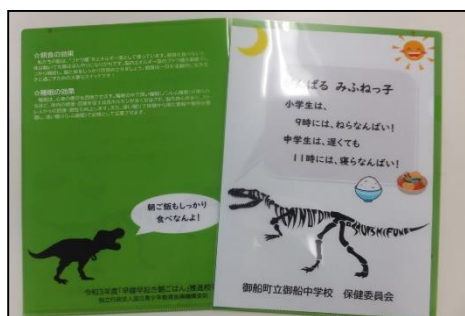
保健委員会では、「早寝・早起き・朝ご飯」についてアンケート調査を行った。（資料2 3）結果は、朝食の調査では、毎日食べる生徒の割合が80%程度で、食べることが多い生徒を合わせると、95%程度だった。特に、1年生が、食べてこないことが多いことから、



資料2 3 生徒アンケートの結果

1年生は、朝のリズムがまだつかめていない生徒が多いのではないかと考えられた。これらの結果を生徒集会で報告し、中体連大会等で自分の目標が達成でき、最後まで力を出すためには生活習慣を整えることが鍵であることを呼びかけ、生活習慣を良くする意識を高めることの大切さを発表した。

また、保健委員会では、健康を呼びかけるためのクリアファイルを作成した。(資料24) どのようなクリアファイルが健康の大切さが伝わるのかを考え、熊本弁を入れ、御船町の観光に使われる恐竜のデザイン等を利用して作成した。全校生徒と御船町の6つの小学校の5・6年生にも配付し健康を意識するようにした。



資料24 クリアファイルのデザイン

夏休みには、母親委員会による「わくわく朝食コンテスト」を行った。本校の健康課題の中で、家庭と連携できる課題を「朝食」と捉え、時間のある夏休みに朝食を自分で作って食べることで、朝食を食べることを促すきっかけになるようにした。(資料25)

自分でレシピを考えたり、作ったりしたものを、2学期にPTA母親部会がよくできている朝食の表彰を行った。工夫していることや自分で作っておいしかった感想などが聞かれ、食事に関心を持った感じが感じられた。



資料25 クリアファイルのデザイン

(3) 生活習慣振り返りカード

健康づくりの起点として、“気持ちのよい朝起き”を目指し、生活の中に自分でできることを増やす必要があった。そのためには、生徒自身が意識してほしいと考え「自分で朝起きる」ことを特に意識できるようにした。

保健委員会が行う「生活振り返り週間」では、ポイントとして、自分の生活時間の目標を考えさせた。①起床時間を決める②自立起床の確認③メディアの使用時間④就寝時刻の決定⑤その他、自分の今週の目標を決めるなどの5つの項目を実施した。

目標に対して、自己評価も実施し自分の生活でできていないところをレーダーチャートでわかりやすく視覚化することにした。自己評価を行い点数化

① 起床時刻は、7時00分 までに起きます。
 ② 朝、自分で起きることができます。
 ③ ゲーム・テレビ・スマホ・携帯・タブレットなどのメディア使用時刻は、夜 9時00分 までにします。
 ※御船中の決まりでは、夜10時～朝6時までには使用しないとなっています。
 ④ 就寝時刻は、11時30分 までに寝ます。
 ⑤ 朝ご飯を食べる を頑張ります。(自分の生活目標)

【 自己評価をしよう! できた○2点 : できた○1点 : あまりできなかった△0点 】

	6日 (月)	7日 (火)	8日 (水)	9日 (木)	10日 (金)	◎ ○ △ 合計点数
① 起床時刻 時 分	○	○	○	○	○	10
② 自立起床	○	○	○	○	○	8
③ メディア終了 時 分	○	○	○	○	○	10
④ 就寝時刻 時 分	○	○	○	○	○	10
⑤ 自分の目標 ()	○	○	○	○	○	10

今週の評価をグラフに表してみよう。

☆あなたの振り返り☆
 前につづけて、おは日、自立起床ができていないので、自分で工夫して、明日が頑張っていくぞ。

☆おうちの方から(家庭での様子などを記入していただくと幸いです。)部活がなくなり、生活リズムが戻ってきたので良かったです。自立起床頑張る~

資料26 生活振り返りシートの記入

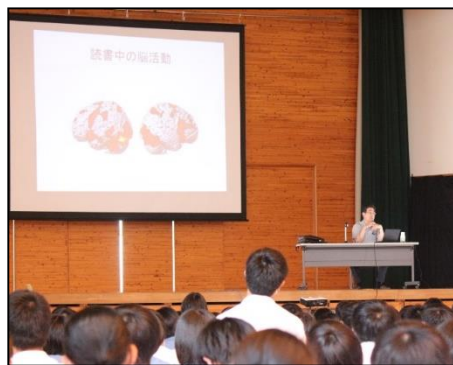
することで、本人の感想にも反省としてレーダーチャートで落ち込んだ部分が記入されていることが多い。(資料26)

メディアの使用時間の目標については、長時間の使用が当たり前になっている生徒もおり、生徒と話をしながら個別の指導も必要になっている。

(4) 教育講演会の実施

7月に生徒の基本的生活習慣の育成を図ることを目的に健康講話を実施した。

講師の東北大学加齢医学研究所の川島隆太所長により「基本的生活習慣が君たちの未来を決める」と題して講話をいただいた。(資料27) “人の心を知る”興味から脳の研究をされたことや、「脳の発達」の研究について科学的に説明があった。



資料27 講話の様子

朝食の大切さ、睡眠の大切さ、スマートフォンの危険性など科学的に説明があり、生徒の心にしっかり残った様子だった。

また、「夢輝き！教育講演会」として、人生の先輩から自らの経験や夢の実現に向けての取組などを紹介していただいた。第1回は、御船町の藤木正

幸町長から、人への感謝や寄り添う心の大切さについて話があり、御船町を良くするためにどんどん声を発してほしいと呼びかけられた。（資料28）

第2回は、元陸上選手の中尾有沙さんに講話をお願いした。練習中の事故で両足を動かすことができなくなり車いす生活になられたが、車いすでパラリンピックを目指し、果敢に自分の夢に向かってチャレンジし続けられていた。中尾さんの前向きな姿や話から、夢を持つことの大切さを伝えていただいた。（資料29）



資料28 御船町町長講話



資料29 中尾有沙さんの講話

(5) エンカウターの実施

生徒の仲間づくりや他者との関わりを上手にするエンカウターの時間を設定した。月1回「ゆうあいタイム」として、放課後15分間のエンカウターを実施し、お互いの価値観の違いを感じることや他者理解を深めるなど、意図的にコミュニケーションを増やす取組を実施した。（資料30）



資料30 エンカウターの様子

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 仮説(1)に関する成果

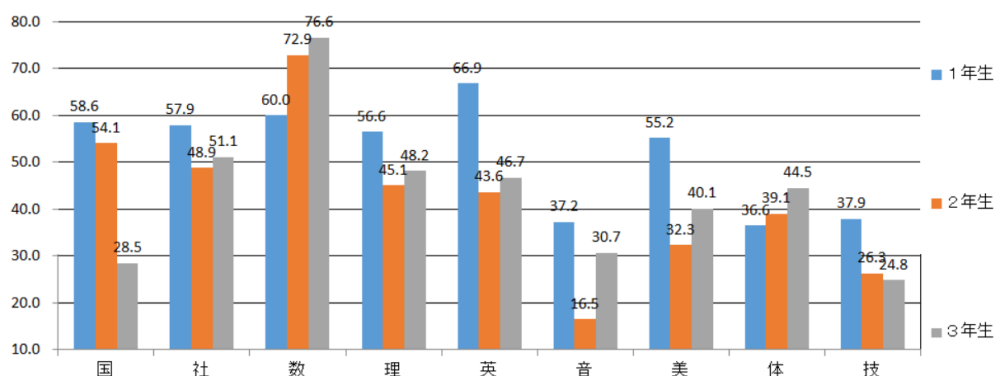
SMARTを意識した授業実践について、生徒に「1時間の授業ごとに『できた』『わかった』『興味が高まった』と感ずることが、いつもできていると思う教科に○をしてください」というアンケートを行った。（資料31、32）

結果として、5月と11月のアンケート結果を比較すると、多くの教科で

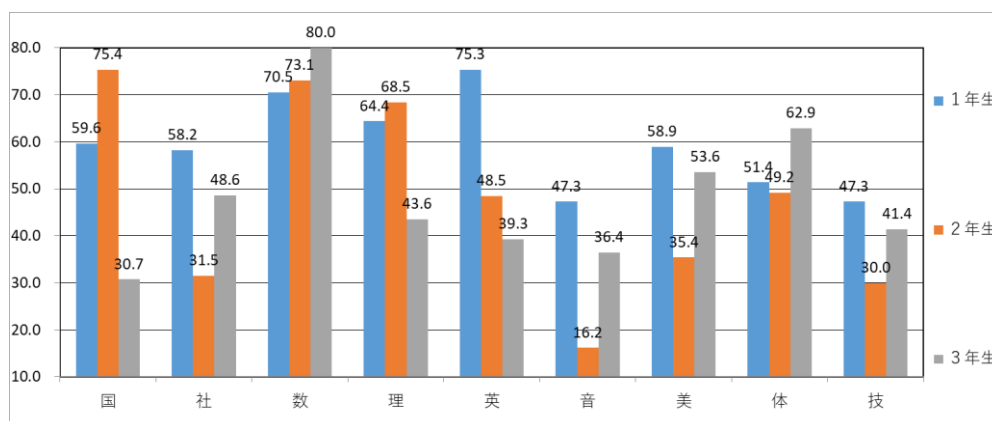
11月のアンケート数値が5月のアンケート数値を上回っていることがわかる。特に、1年生の数学、音楽、体育、2年生の国語、理科、体育、3年生の美術、体育、技術では10%以上の増加があることがわかる。また、国語、数学、美術、体育、技術の4教科に関しては、全ての学年において数値が増加しており、授業改善が進んだことがうかがえる。

ここで、5月と11月のアンケートにおいて顕著な伸びが見られた2年生の国語と理科について分析する。授業を担当する2人の教員に対するインタビュー調査の結果、この2つの授業の共通点として、それぞれワークシートを配付し、その時間に学んだことを振り返りとして記入させ、毎時間添削を行って次の授業までにフィードバックしていることがわかった。また、振り返りを記入させる際には、「A・B・C」といった評価基準を明確に示し、「めあて」の達成度が具体的な形でわかるように工夫していることがわかった。

この取組により、生徒は何がどの程度達成できればめあてが達成できたことになるのかを詳細に理解した状態で振り返りに臨み、それに対して素早くフィードバックを受けることで「わかった」、「できた」、「興味が高まった」という実感を高めていったと考えられる。すなわち、評価基準を教師がもっておくだけでなく、それを生徒に具体的に提示し、理解させることが、生徒の自己評価能力の向上につながり、「わかった」、「できた」、「興味が高まった」と実感するきっかけとなったと推測される。このことは、ただ単にめあてを提示したり、たしかめを行うことに留まらず、どのようにめあてを意識づけ、どのようなたしかめを行えばより効果的なのか考える上で有益であり、SMARTな授業実践をさらに深化させるための手がかりとなると考える。



資料 3 1
1時間の授業ごとに「できた」「わかった」「興味が高まった」と感じるものが、いつもできていると思う教科
(令和3年5月7日実施)



資料3 2
1時間の授業ごとに「できた」「わかった」「興味が高まった」と感じることが、いつもできていると思う教科
(令和3年11月1日実施)

(2) 仮説 (2) に関する成果

資料3 3は、平日の家庭学習時間に関する、昨年度と今年度のアンケート結果を比較したものである。

		2時間以上	1～2時間	30分～1時間	30分以下	していない
中学 1年生	今年度	17.7%	50.4%	29.1%	2.8%	0%
	昨年度中1生	11.6%	31.9%	50.0%	5.11%	1.4%
中学 2年生	昨年度(中1時)	11.6%	31.9%	50.0%	5.11%	1.4%
	今年度	8.0%	35.2%	52.0%	3.2%	1.6%
	昨年度中2生	16.1%	39.4%	33.6%	8.0%	2.9%
中学 3年生	昨年度(中2時)	16.1%	39.4%	33.6%	8.0%	2.9%
	今年度	65.2%	25.2%	8.1%	1.5%	0%
	昨年度中3生	49.5%	33.3%	12.4%	2.9%	1.9%

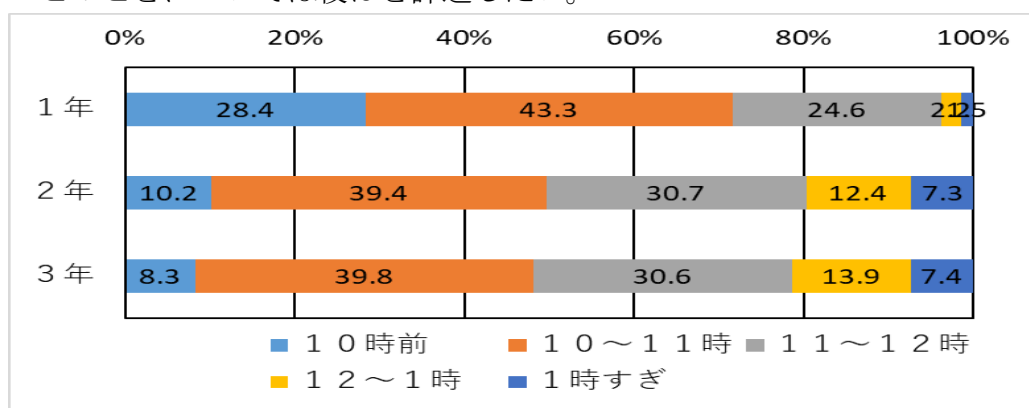
資料3 3 平日のどれくらい家庭学習をしているか
(令和3年5月7日実施)

この資料からわかるように、経年比較した場合、現中学2年生は、昨年度(中学1年生時)と比べて「1～2時間」と答えた割合が増加している。また、現中学3年生は、昨年度(中学2年生時)と比べて「2時間以上」と答えた割合が大きく増加している。受験を迎える学年ということもあるが、昨年度

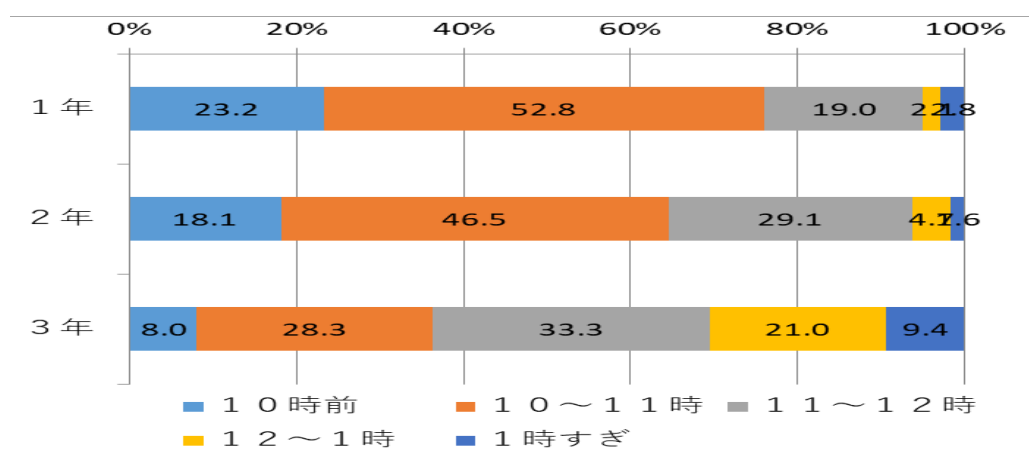
の3年生と比較しても「2時間以上」と答えた割合が増加し、「30～1時間」、「30分以下」、「していない」と答えた生徒の割合が減少していることから、家庭学習習慣が定着してきたといえる。ただし、中学2年生においては、「2時間以上」と答えた割合が減少し、「30分～1時間」と答えた生徒の割合が増加している。この点は課題として後ほど述べることとする。

(3) 仮説(3)に関する成果

生徒アンケートの「昨日、何時に寝ましたか」の質問項目の昨年度と今年度を比較すると、1年生と2年生において、11時までに就寝すると答えた生徒の割合が増加しているとともに、9割以上の生徒が12時までには就寝していることがわかる。(資料34、35) 先の学習意欲に関わる数値が向上していたことと重ねて考えると、基本的な生活習慣の確立が学習意欲の向上にもつながったと推測できる。しかし、3年生を見てみると、12時以降に就寝すると答えた生徒の割合が増加しており、この点に課題が見られる。このことについては後ほど詳述したい。



資料34 昨日、何時に寝ましたか (令和2年11月26日実施)



資料35 昨日、何時に寝ましたか (令和3年11月1日実施)

2 課題と今後の志向

(1) 仮説(1)について

生徒アンケートの「1時間の授業ごとに『できた』『わかった』『興味が高まった』と感ずることが、いつもできていると思う教科に○をしてください」の項目において、多くの教科で増加傾向にあったが、過半数を超えない教科や減少傾向にある教科もあった。学習内容や教科の特性にもよるが、今後はSMARTな授業実践を行うことは前提としつつ、生徒が具体的に授業中のどのような場面で「できた」「わかった」「興味が高まった」と感じているのか、また、それを促したのは授業や教師のどのような要素なのか、その内実を詳細に調査する質的な研究の蓄積が求められる。例えば、T（たしかめ）であれば、どのようなT（たしかめ）を行うことが、生徒の「できた」「わかった」「興味が高まった」と感じることにつながるのかについて、また、なぜそうなったのかなどについて、授業記録の分析やインタビュー調査なども活用することで詳しく追究していきたい。

(2) 仮説(2)について

平日の家庭学習時間に関する、昨年度と今年度のアンケート結果を比較したところ、中学2年生においては、「2時間以上」と答えた割合が減少し、「30分～1時間」と答えた生徒の割合が増加している。中学2年生は、学校生活にも慣れ、学ぶ意味や目的を見失いがちな学年である。その中で自ら課題を見つけ積極的に学習に取り組む生徒を育てるという観点からすれば、「授業と関連性の高い課題の工夫」は、必要最小限の課題（宿題）に取り組むという点では一定の成果を上げることができた反面、宿題以外に主体的に課題を見つけ学習に取り組むことへのつながりは薄かったと推測される。今後は、受験や定期試験といったもの以外で、学ぶことそのものの意味や目的を実感できる授業づくりを行うことで、学校教育目標である「夢の実現に向けて共に努力する生徒の育成」を図りたい。すなわち自己のキャリア形成と関連付けた学習習慣づくりである。学習指導要領においても、「主体的な学び」は「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、(中略)次につなげる学び」と定義されており、学ぶことそのものへの動機付けが今後求められるところである。

(3) 仮説 (3) について

基本的な生活習慣の確立という点から、3年生では、12時以降に就寝すると答えた生徒の割合が昨年度と比較して増加している。これは仮説(2)に関する成果でも述べたとおり、3年生の家庭学習時間が大きく増加したことによると考えられるが、資料から3年生の「できた」「わかった」「興味が高まった」と答えた生徒が50%を下回る教科が複数あることから、より「早寝・早起き・朝ごはん」などの基本的な生活習慣、スマホルールの遵守などを徹底し、学校での授業に集中できる環境を整えなければ、「できた」「わかった」「興味が高まった」という実感にはつながらないと考えられる。